

事物論に於ける対象についての考察

西 井 元 昭

一 対象についての多面的意味

私達は先に『哲学論集第二十九号』三十二頁「物についての多面的意味として、物質乃至物体―身体のジャンルに属するものと対象のジャンルに属するものとを区分し、更に事物のジャンルに属するものを挙げておいた。併しこれら三つのジャンルのものは全く別々に切り離して考えられるものではなく、互いに密接に関連していることは言う迄もない。物質や他者の身体は対象として現れることが多く、又それらは事物としての『もの』となることも屢々である。そこで私達はそのうち対象という語の意味について考えてみたいと思う。対象という語に相当するフランス語には唯一つ *objet* という語しか存在しないのであるが、そのド

イツ語には *Objekt* と *Gegenstand* という二つの語がある。この二つの語は共に客体としての一つの『もの』を指す点で全く同じであって、ただ両者はその語原を異にしているに過ぎないのである。即ち前者はラテン語の *objectum* 或は *objectio* 『前に投げること』、『前に置くこと』などの意から由来するのに対し、後者はその原意 *das Gegenüberstehende* 『向かい合って立つもの』、『対立するもの』から *Gegenstand* 『向かって立つこと』、『対して在ること』に転化したのであろう。けれどもこの対象が観念的事象である場合は、それが単に *Gegenstehen* 『対して立つ』ばかりではなくて、言わば *gegenbestehen* 『対して存立する』という意に解されるし、又対象が現象する事象である場合には、こう言ってよければそれは *gegenentstehen* 或は

gegenestehen『対して生じる』という意味をもつとも考えられよう。従つてそれがたとえ超越的対象であらうと内在的対象であらうと、それは単なる個物としての対象にとどまらず、諸存在の存立条件、状態、変化、性質、関係性等の事象全般に至る迄対象となり得る。それが現前しようとして現前しないにかゝわらず、又それが表象されようと表象されないにかゝわらず対象は存在するのではなからうか。そこに認識の対象と存在としての対象とが、そして知覚対象や意識の対象と思考対象や判断の対象とが区別されるのではないだろうか。すると客観的存在としての対象、客体としての対象の他に、主観的或は超主観的な対象が浮かび上ってくる。また勿論個物が対象となるばかりではなく、個物間の関係性や諸存在の性質、変化なども対象となってくるのである。けれども私達はいかに対象と私達のイメージとを混同してはならないであろう。尤も諸々のイメージのうち意識的知覚の対象となるものもあるであろうが、それらがすべて対象化されるとは限らないのである。対象化することとは少くとも主体が或るものに関与することになるのであるから、意識的知覚がそれを目指すか、悟性的判断が命題として或る事態をとり挙げる一問いを立てることを前提として対象が現出するのである。何の対象でもない

ようなイメージは単なるイメージとして次の瞬間には消え失せてしまうものでしかない、たとえそれが *Engramm* として残存しようとも。そこで私達は先ず最初に、諸々のイメージのうち或るイメージが如何にして対象となり得るかを考えてみることにしたい。その上でこの対象はどのような性質や変化を示すかを検討し、又思考や判断の対象としてはそれがどのような形態を現示するのかを考察しようと思う。更に図としての対象と地としてのイメージという構造を通して、対象と形態及び対象と行動についても言及してみることにする。

二 イメージと対象

先ず私達のイメージについて考えてみよう。今、私は自分の書斎の椅子に腰掛けている。私の周囲には幾つかの書棚があつてそこに書物が並べられており、机上には幾冊かの書物とかペンや書類とかが雑然と置かれ、窓にはカーテンが引かれていた。カーテンを開けると窓ごしに外の風景が繰り拡がる、遠くの方山々や点在する家や樹木、それに道路などが見られ、その道を時折り走り去る車が目に入ってくる。これらのイメージは私の眼前を掠めるように浮かんで消えて行くのであつた。私は窓の外を眺めながら目に

入る風景の一つ一つのものに特に注意を払うでもなく、又何を考えるでもなくただぼんやりと時を過ごしていた。どの位時が経ったであろうか、ふと或ることが頭に浮かび次第にその内容がはっきりしてきた。その或ることというのは今日の午後早々にX氏が私宅を訪問してくるということであった。先のイメージとは何の関係もない事柄が私の意識の対象となつて来ている。勿論私はX氏と面識があり、同氏の訪問が前以つて予告されていたのである。従つてX氏のイメージは当然私には描かれ得る。そして記憶を伴う具体的な知覚がその表象を通して意識内容を形成するとき、X氏のイメージは知覚の対象となると同時に意識の対象ともなるのである。ところで彼の来訪の目的が私には全く解っていないかった。一体何のために彼は私に会いに来るのだろうか。私は彼に何か依頼を受けるのだろうか、何れにせよ彼の話を聞かないうちは何も解らないと私は思った。このように私は彼のイメージを描きつゝ以上のようなとりとめもないことを考えていた。そういったことは知覚され意識されはしても思考や判断の対象にはなり得ない事柄であったのだ。その間私は次々と二・三本の煙草に火をつけて吸っている自分には気付いていなかった。ただ煙草の煙が部屋に立ちこめるのをぼんやり見つめているだけであった。

この煙草もその煙も私のイメージに過ぎないのである。ただし、煙草を一本手にとるときや煙草に火をつけるとき及び煙草の灰を灰皿に落とすときには、一瞬その煙草や灰皿、それに煙草の先端やその先端の灰などが意識的知覚の対象となるが、それらの行為が終るとそれはも早や一つのイメージとなり消え失せてしまうのである。すると突然私は我に帰つてつい先程迄読んでいた書物をもう少し読んでみようと思ひその書物の読みかけの頁を開いた。この書物を手にとろうとすると、それは諸々のイメージのうちで選択されたもの、知覚の対象となつたものである。併しそれを手にして頁を開け読み始めた途端、書物自体は再びイメージへと下落し殆んど意識されなくなる。代つてその頁の文字―その一語一語が意識的知覚の対象となり、それが意識の意味志向作用の対象とも又その意味充実作用の対象ともなると同時に、その表現の意味が思考の対象となっていくのであった。それにも拘らず読んでいる自分を意識することもなく、そういった対象が私の意識の内容を占めていくのである。

午後になってかのX氏が訪れて来た。彼とはもう十数年も会つてはいなかったので、私の描いていた彼のイメージと現在の彼のイメージとは随分異っているのに気付いた。

彼と面談している私にとって彼は私の意識的知覚の対象であり、又私の方も彼にとっての意識的知覚の対象であるのであった。このように互いに相手のイメージから対象へ、そして対象からイメージへの転換を繰り返しつつ、時には話題の内容が思考や判断の対象ともなり、或は又話題とは直接関係のない事柄が意識の対象となったりして、二人の会話が交わされていくのであった。しかも両者は互いに微妙な心理的变化を蒙りながら、私がそれを意識することもあれば意識しないこともあり得る。少くとも、それがイメージのまま次の瞬間には消えてしまう場合と、そのイメージが意識の対象となる場合とが考えられる。併しながら、イメージも意識も共に変換を蒙るものであるから、イメージは言うに及ばず意識の対象も決して固定されたまゝであることはないのであって、その意味では意識の対象そのものも変化を受けることとなる。殊にそれが対象他者である場合は尚更であるだろう。X氏との面談は約一時間程度で終り彼は私宅を去って行った。彼はもう私の知覚乃至意識の対象ではなくなり、ただイメージとして残るのみになつて、この意識の残像としてのイメージもやがて消え失せてしまうことであらう。

私は書物を読む気にもなれずぶらっと外へ出て行った。

書店へでも行ってみようかと思ひバスの停留場でバスを待つことにした。擦れ違う人々やバス停で私と一緒にバスを待つ人々は、すべて私にとってイメージとしての存在でしかなかった。暫くして一台のバスが遠くの方からこちらへ走って来るのが見えてきた。そのバスが近づきにつれてそれは私にとってのイメージから私の知覚の対象へと移行していった。併し停留場に接近しそこに止つたそのバスの行先が私の目的地と異つていたので私はそれに乗らなかつた。それが私の乗ろうとするバスでないことが分つた途端、私の対象としてのこのバスは単なる私のイメージへと下落して私の関心の外へと出てしまい、そのバスが再び遠ざかるにつれてそのイメージも消え去ってしまったのである。数分後にもう一台のバスがやって来た。先と同様そのバスのイメージは私の知覚対象へと移行し、それが私の乗ろうとするバスであることが分かると私はそのバスが停車すると同時に入口の扉の方へ向かつた。その時の私の知覚対象はもうそのバスの扉へと移り、扉が開かれると対象はそのタラップへ、そして私がバスに乗り込んでしまうと対象は私の座ろうとする座席へと移って行くのであるが、私が一旦座席に座つてしまつたとその座席も亦、それ以前に既にイメージになつてしまつたそのバスの本体や扉のタラップと同一

じようにイメージへと下落し、やがてそれらすべてのイメージが次々と順々に薄れて消えていってしまうのであった。更にバスが走り出すと走馬燈のように変り行くその窓に映る外の風景も当然イメージとして浮かんでは消え失せていくのである。私は目的地でバスを降り、通りに面した数々の店のショーウィンドを眺めるでもなくただイメージの浮沈消長を繰り返しつつ、或る書店の前に辿り着きその店に入った。書店の棚に並べられた書籍をずーと見渡しながら私の興味を引く書物を探し求める。その書店の奥から三番目の書棚の中の或る書物が私の注意を引きその一冊を取り出し頁を開いて目を通してみる。その書物は他の諸々のイメージとしての書物のうちから選択された書物であって、当然意識的知覚の対象となった書籍なのである。その際知覚の対象は即、意識の対象ともなる。このように意識的知覚の対象となったものは続いて行動の対象にもなり得るのである。かくして私が書物を手にとってそれを開けその内容に目を通す行為も意識の意味志向作用を伴いつつ遂行される。そして文を読むという行為は一面では語の意味を思考の対象とすることになろう。ところで語の意味が思考の対象となっている間は意識の対象(内容)も同じものなのであって、もしそれを思考の対象とすることが停止されるや

否や、それが意識の対象であることも亦停止される。そしてその書物を閉じて手に持っているうちはそれは知覚の対象としてとどまるが、書物を書棚に戻すとそれはもうイメージに変わり、そのイメージも遂には消えてしまうであろう。けれども私はその書物を買って帰宅することにした。それを手に持っている間、知覚の対象であったその書物も次第に知覚の残滓としてのイメージへと移行し、もしそれをカバンにでも入れてしまえば、そのイメージも薄れて消えていってしまうのである。ところでこのような客観的存在としての実在のイメージの他に、実在しないもののイメージが考えられるであろう。

イメージは内に描かれるものであるだけにそれは多分に想像力の助けを必要とする。だからと言って、イメージが志向性をもつ意識と同じものであるとか、それが想像的意識の産物であるとか言うのではない。何故ならイメージは決して対象を指定的にとらえるものではなく、イメージそれ自身が漠然とした対象化以前の心像だからである。従って実際に存在する可視的なもの、感覚によってとらえられるもののイメージの他に、想像上のもの及び記憶上のもののイメージが現れることもあり得る。それは実物不在のイメージであり架空の存在のイメージでもあるのだ。私が或

る夢想到ることがあったとしよう。今私は川辺に腰を下ろして水の流れに見入っている。特に何を考えるでもなくただぼんやりとしているだけなのだ。この川の水は一体どこから流れて来てどこへ流れて行くのだろうかと思ひながら、じつと川の流れる水を眺めているのである。私の眼前に浮かんでいるのは漠然とした流れる水のイメージではない。どれ位時が経ったであろうか。この静かに流れている川の水が突然水嵩を増し、それは速い流れに変わり奔流となつて川岸を洗い流さんばかりになつて来た。今にも川は氾濫して大洪水となる様相を呈し始めた。荒れ狂うこの奔流は私をも飲み込んでしまふようになる。この川の流れる水のイメージは次第に増幅して巨大な夢想に変わつていたのである。かくしてそのイメージは自らの巨大な像によつて、イメージとしての姿をこの幻想の陰に隠されんばかりになつてゐるのだ。けれどもこのような夢想や幻想もやはり一種のイメージであることには変りない。これこそ不在のイメージ、架空の世界のイメージであつて、それは実在のイメージよりもずっと脆く残像というものも殆んど残さないように思える。併しながら、この不在のイメージの方が実在のイメージよりも遙かに強い印象を私達に与えることがよくある。これも一種の物質のイメージに他なら

ず創造的な想像力の産物であるであらう。この想像力によつて光とか火とか大地についても数多くのイメージが産出され得る。かゝる想像上のイメージはそれが対象化されるには、はつきりと意識の内容が形成される必要がある。その夢想が意識の対象となることは決して不可能ではないが、それは対象化の寸前に消え失せてしまうことが多い。イメージと意識との分岐点は極めて微妙であるが、私達はイメージがそのまま流れ去るときはそれを単なるイメージとして意識の対象と区別することにする。従つてイメージがはつきりと意識的知覚の対象となる場合のみ、それが対象化されたものと私達は見做すのである。このようにイメージは本質的に変様と現出及び消失とを絶えず繰り返すものであるという点から、実在のイメージも想像上のイメージも程度の差こそあれ本性上の相異は存在しないし、その意味でも両者の対象化は充分可能である。ただ実在のイメージの方は、私達が実在をいつでも感覚を通してとらえることが出来るが故に、私達にとつてその対象化が比較的容易であるというだけに過ぎないのである。また記憶のイメージについても想像上のイメージと同様のことが言ひ得る。ところで現在の記憶のイメージとは過去の経験の潜在的な意識下の蓄積保存によるイメージへの湧出を意味するとは

言い切れない。多分に過去の経験と現在の心的状態との関連において記憶心像が現れるのであって、この現在の心的な動機付けなくして記憶のイメージは描かれ得ない。更に記憶のイメージには想像上のものが混入してくる、即ち記憶と想像とが混じり合ったイメージが現われることすらある。いずれにせよこの記憶のイメージが意識の対象となるとき、その記憶は少くとも現在の意識に他ならないであろう。そして記憶のイメージはそれが意識されると同時に知覚の対象ともなり得るのである。記憶されて在るとはそのイメージの対象化を意味し、それが現在の意識的知覚の対象であるということなのだ。従って私達の具体的な知覚は記憶のイメージをも対象化するであろう。そうすると、イメージがイメージのまま浮かんでは消えてしまうか、或はイメージが対象化されるかは、それが意識されるか意識されないかに係っていると言えるのではあるまいか。その意味では知覚の対象と意識の対象とは同一とならざるを得ない。そこでもし私達がこの知覚対象と意識対象とを区別しようとするならば、両者の相異が一体どこにあるのかを探ってみなければならぬであろう。

三 知覚対象と意識対象

知覚は外界の事物を知る働きであるという意味では、知覚の対象というのは私達にとって超越的な、つまり意識の外部にある存在或は事象ということになる。それに反して意識の対象とは内在的な志向的对象のことであって、意識内容として現われるものを意味するのである。併しながら知覚を仔細に検討するならば、それが単に外界の事物のイメージを対象化するばかりではなく、想像上のイメージや記憶上のイメージをも対象化し得るとすれば、その対象は既に意識の対象ともなっているのである。その際に働く知覚は勿論内部知覚と言われる。けれども外界の事物に関しては、そのイメージが知覚の対象となるのは当然外部知覚の働きによるのであるが、その知覚を通して事物のイメージが意識の対象ともなるのはどうしてであろうか。もともとイメージは意識の外部にあり知覚の対象となるものなのであって、イメージが直接意識の対象となることはない。イメージが知覚され知覚の対象となることによって、その知覚されたものが意識の内部へ浸透していくと考えられはしないだろうか。そこで初めてそれは意識の対象となるのである。従って或るイメージが知覚の対象となることと、

それが意識の対象となることは厳密には区別されなければならない。例えば私がペンを手に執り紙面に何かを書くうとするとき、明らかにペンや紙面は私の知覚の対象となるが、私はそのペンや紙面をはっきり意識してはいない。意識はむしろその書くうとする語の内容に向かっている。そのとき意識の対象は書いてゆくべき一語一語ということになり、その意味の内へと意識は志向していつている。尤もペンを手に執ろうとする行為や紙面に何かを書くうとする行為も意識的知覚を伴うものであろうが、その際直接に働いているのは感覚とか運動知覚乃至空間知覚とかであって、意識はそれらの知覚を通して間接的にどうか或は暗々裡に働いているに過ぎないであろう。従って意識的知覚とは意識を伴った知覚のことではあるが、意識はいつもそれが内部知覚にせよ外部知覚にせよ知覚を介して働くものである。それに対し知覚の方は必ずしも意識作用を伴うとは限らない。そこに知覚の対象と意識の対象との微妙な相異が存在すると言えるのである。かくして諸々のイメージが知覚の対象となり、その対象が図としてくっきりとその輪郭を現わすとき、同時に意識はその知覚された対象へと志向しているのであって、他のイメージはすべて地としてその形象を薄れさせられてしまう。しかもイメージのこの

選択は利害関係をいち早く察知する身体によって行われる、即ちその利害関係乃至関心というものは意識的ではなく言わば反射的に身体機能によって察知されるが故に、私達の身体がイメージの選択の契機となるのであろう。ところで知覚は感覚と密接に結びついているので私達の身体機能の一つでもありながら、その対象は外界の事物にとどまらず想像上のものや記憶されたものに迄及び得る。併し知覚は知覚されたものの多様性を統一したり、その対象を内部で再構成する能力などをもち合わせてはいないのである。その意味では知覚の対象と意識の対象とが異ると言うよりも、むしろ対象への知覚の係わり方と対象への意識の係わり方とが全く異っていると言うべきであろう。私達が何ものかを知覚した途端、その対象はイメージへと下落するか或は意識の対象となるつまり意識の志向作用を受けるかどちらかである。後者へ移行する場合、作用的側面から言えば意識は志向的に内在的对象へ向かうのであるが、内容的側面から言えば知覚されたものが意識の内部へ浸透するのである。それでは超越的对象に対しては意識はどのようにして係わるのであろうか。意識がいつも自己の内部としての対象に係わる限り、そして何ものかの意識とは意識それ自身のことであり意識の外部の存在である超越的なものが

意識から独立して存在している限り、超越的なものに対して意識は何ものの意識でもなくなるであろう。従って超越的なものに直接繋がるものはイメージであって、知覚の対象となるのもそのイメージに他ならない。このように超越的なものはイメージを介して知覚されることによってのみ意識と係わり得るのであるから、意識の対象は飽く迄内在的な志向の対象でなくてはならないであろう。何ものかの意識とは意識それ自身であり、何ものかは決して超越的なものではなく内的な何ものであるが故に、意識の対象の変様は意識それ自身の変様でもあるのだ。その対象が自己である場合でもそれは自己についての意識即ち自己意識であり、もしかりにこの自己と意識とを分離するならばその意識も消え失せてしまう。かゝる自己意識を純化しようとしても、純粹我に到達することは原理上自己意識そのものを超えその絶対否定を通してしか可能でないであろう。併し現実には或る意識が薄れては消えると同時に又変わった意識が生ずるように、意識の対象つまりその内容は刻々変様を蒙るものである。ただ意識の作用そのものは決してなぐならないのであって、意識の流れは何ものかにぶつかっては泡の如く消えかゝりつゝ新たな意識の流れとなつて再び何ものかを目指して志向作用を繰り返して進んで行くの

である。その上、先にも述べた通り意識的知覚というのは知覚の対象が意識されときの知覚のことであつて、知覚されはしても意識されないものも存在し得るのである。但し実際には知覚されたものは殆んど意識の対象となると考えていゝと思われる。そこで今度はその意識の対象と思考の対象とは一体どのような関係にあるのかを考えてみよう。

四 意識対象と思考対象

何ものかの意識でないような意識は存在しないのであるから、意識とその対象とは共に現われるのも消えるのも言わば一体である。ところで思考についても同じように言うことが出来る。ただ意識の方はいつも知覚を介して働くのに対し、思考の方は必ずしも知覚を媒介とする必要はない。その意味で思考される対象というものは更に広い範囲に及ぶのであって、私達は現実と全くかけ離れた事象を思考することも出来るのである。その点でそれは私達のイメージと大層よく似通っている。従つて夢想乃至幻想のイメージを思考の対象とすることも決して不可能ではない。併しながら、思考の内容が曖昧で漠然としているものである場合、それを明確にするためには思考の対象を限定しそこに含まれる何等かの意味を抽出するか、もしくは何等かの問いを

自らに提出する必要がある。もし前提が明らかである場合は、その前提から或る論理的形式に基づき推論を下すか、又はそれに含まれる意味から直接結論を引き出す方法がとられることになる。前者は所謂推理即ち演繹的推論により後者は直観によって結論が導き出されるものである。ところでこの思考と表現との関係はどうなのであるか。或る意味をもつ言語的表現が命題として概念の構成によって成立しているとすれば、思考と表現とは一つの線上にあることになる。そうすると思考されるものと表現されるものとは極めて密接な近似的対象と云うことが出来る。更にこう言っても差支えなければ、思考と表現との関係はそれらの対象的側面としての事物の概念と命題との関係に対応するのではなからうか。何故ならば私達は思考から表現へ移ることも表現から思考へ移ることも出来るように、事物の概念から命題へと進むことと命題から概念へと進むことが考えられるからである。命題から概念へ進むこととは、事物の諸性質や諸状態についての種々な判断乃至命題が前提となつて概念が作り上げられるということである。いずれにせよ私達は表象不在の対象を思考することも出来るのであつて、自己意識を始め空虚とか存在喪失とか非存在の存在なども思考の対象となり得る点で、それらは意

識の対象を遙かにはみ出している。私達は非存在を意識することは出来ないであらうがそれを思考することは可能である。思考の対象を何も客観的な实在や事実に限る必要はない、空想的な架空のイメージを思考の対象とすることもあり得る。ただそれを記号的乃至象徵的に一つの表現の対象とすることによって思考の内容がそれなりに明確な或る種の意味をもつこととなる。過去に自分の最も親しい友の死に遭遇した私がその後この死者と会つて会話を交わすという夢想到に耽るとしよう。私はこう尋ねてみる、「君は死んで一体どこへ行ったのか、今君の居るところはどのような場所なのか」と。すると彼は「こゝは静かな湖のほとりで湖面には白鳥が数羽泳いでおり、湖畔の辺り一面には色とりどりの草花が咲き匂っている」と答える。私はその言葉通りのイメージを描きながら、人間は死んだら一体どこへ行くのだろうかと再び今度は自分に問いかけるのであつた。勿論私にはその答がはっきり出てくる筈はない。そこで私は死とは何かという問いに出くわす。こゝでは既に私達はこの夢想のイメージから思考の対象としての死後の世界や死そのものへと移っているのである。そして死とか世界とかの概念から、思考を伴つた言語的表現によつて死とは生の終末であるとか死は生の究極的変様であるとかの命

題が生じてくる。(ただしこのような判断が妥当であるか否かは別問題である。)又そこから、如何なる存在も非存在に支えられて存在するとか、生は死によって真の意味をもつかいという命題が導き出されるであろう。その上、意識の対象となった現象、諸々の存在の状態と変化並びにそれらの存立条件、周囲世界の状況、あらゆる次元における存在の関係性等々も、思考の対象となることによって種々の概念及びそれら概念を含む命題へと推移していくこともあり得る。しかも思考の過程においてその対象が具体的なものから抽象的なものへ、或は抽象的なものから具体的なものへの変転を経て何等かの帰結に到達する。この帰結も亦一つの事物に他ならないのであって、思考の対象となることは取りも直さず一種の事物化を意味する。何ものかが思考の対象となるや否やそれは外的なもの即ち事物と化する。概念が思考の基本的な形態である限りその対象の事物化は避けることが出来ないものである。

五 対象と形態、対象と行動

私達がこゝでとり挙げる形態というのは必ずしも心理学におけるゲシュタルトを意味するものではないが、対象それ自身が一つの構造をもつ以上、対象と形態とは無関係で

はあり得ない。特に他者の心理的事象を対象とする場合、この心理的事象はそれの全体的な構造を一つの形態として現わすものであって、かゝる心的現象は対象化されると同時に形態化される。併しその形態化は何も心的現象に限られるものではなく、あらゆる対象に適用され得るであろう。形態というのは地に対する図として示される個物の形象的なものでなく、対象全体の構造そのものが形態なのである。従つて私達の言う形態とは対象の構造が分析される以前の状態を指すのであり、その構造が分析されるのはそれが思考の対象となる場合であろう。だがこの構造が知覚乃至意識の対象である間は、それは分析されずに形態としてとどまる。そしてその際何ものかについての意識は形態の全体的構造そのものについての意識なのであり、この意識の対象が思考されるや否やその構造は分析され諸要素に分解される。しかもこれら諸要素をどのように寄せ集めようとも、それは構造全体の形態に戻りはしない。形態は飽く迄形態であり対象そのものの構造の全体である。それは又意識の対象であり得ても思考の対象とはなり得ないであろう。ところどころ意識的知覚の対象としての形態は行動の構造と対応する。何故ならば知覚の対象は必然的に或る行為の対象へと導かれ、知覚乃至意識は行動の構造のう

ちに自らの対象を再認するであろうからである。しかもその知覚が他者の行為を自分の原初的な対象とすることによって、自らも新たに対象への自己の行為を意識するに至るのである。その対象への行為としての行動は知覚を介して意識並びに自分の身体と不離の關係にあるであろう。対象への働きかけは内的には意識作用であると同時に外的には身体の行為でもあるが、その際知覚は対象を通して何らかの意味で意識である。言い換えれば知覚の対象は意味志向的には意識の対象でなくてはならない。併し私の身体は意識の単なる外皮でもなければ単に知覚される対象となるものでもない。それどころか私の身体は知覚された対象へと向かう行動の主体としての機能を備えている。身体には対象化される身体即ち他者の身体と私の身体つまり主体となるべき身体とがある。それでは私の身体が私の意識の対象となることがあり得るのであるか。一般に知覚の対象となる身体はイメージとしての他者の身体であるが、そうすると私の身体が意識の対象となるとそれは他者の身体として意識されるのではなからうか。或は又他者から客体化された私の身体を私が意識するのであるか。何れにせよ原理的には、それは客体としての身体を更に自ら客体化すること、並びに主体としての身体を更に自ら客体化する

ることにならう。併し意識と私の身体との關係を果たしてこのように主体と客体との關係に還元し得るものなのだろうか。作用の主体である意識と行動の主体としての身体との關係を私達は一体どのように考えればよからうか。私達はこゝで内部知覚の対象と外部知覚の対象との相異を考慮に入れる必要がある。先にも述べた如く、直接意識の対象となり得るものは内的な存在乃至現象であるが故に、その際の意識的知覚は勿論内部知覚ということになる。ただ外界の事物の存在並びに事象が意識される場合、それらのイメージが知覚の対象となりその対象が意識の内部に浸透するのであるが、そのときの知覚は外部知覚なのである。併し身体の方はそれがたとえ私の身体であっても、それは意識にとって外部の存在であるが故に、身体は外部知覚の対象としての存在即ち外界の存在に対してしか働きかけることが出来ないということになる。しかも意識的知覚は諸々のイメージの内から自らの対象を選択する能力をもつのに反し、身体はその対象を選択する契機としての役割しか演じられないのである。だからと言って身体は外界の事物を取り扱う道具でもなければ、又それは自動機械としてのロボットやコンピューターでもない。感覚や知覚は身体の機能の重要な役目を担っているばかりではなく、意識作用も

知覚の働きを介して身体と微妙に影響し合っている。その意味で身体を知覚や意識と全く切り離して考えることが出来ないのは当然であろう。中でも知覚は身体と密接に結びついていて、身体を通してそのあらゆる可能的行動の輪郭を描き身体の行動範囲を設定する。その際の知覚の対象は勿論単なる個物ではなく、諸々の個物のイメージを結び線に沿って描かれた一つの世界、言い換えればパースペクティブなのである。かくの如く行動の構造は、身体は言つに及ばず知覚や意識並びにそれらの対象である形態までも巻き添えにする、即ち行動の構造は、（身体—知覚—意識—対象—パースペクティブ）という簡略な循環的図式によつて凡そ説明がつくであらう。

○参考文献

- Brentano, F.: *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, Bd. I, 1924.
 id., Bd. II, *Von der Klassifikation der psychischen Phänomene*, 1925.
 id., Bd. III, *Vom sinnlichen und noetischen Bewusstsein*, 1928.
 Meinong, A.: *Über die Erfahrungsgrundlagen unseres Wissens*, 1906.
 Über die Stellung der Gegenstandstheorie

im System der Wissenschaften, 1907.
 Abhandlungen zur Erkenntnistheorie und Gegenstandstheorie, 1913.
 Über Möglichkeit und Wahrscheinlichkeit, Beiträge zur Gegenstandstheorie und Erkenntnistheorie, 1915.

Husserl, E.: *Logische Untersuchungen*, Bd. I, Bd. II, Bd. III, Aufl. 2, 1913-1921.

Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, 1913.

Die Idee der Phänomenologie, Husserliana II, 1950.

Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, Husserliana VI, 1954.

Hegel, G. W. F.: *Phänomenologie des Geistes*, 1807.

Wissenschaft der Logik, Bd. I, Bd. II, 1812-1816.

Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse, Aufl. 3, 1830.

Hypolite, J.: *Genèse et structure de la phénoménologie de l'esprit de Hegel*, 1946.

Bergson, H.: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889.

- Matière et mémoire, essai sur la relation du corps à l'esprit, 1896.
- La pensée et le mouvant, 1934.
- Valéry, P.: Variétés, 1924, Cahiers, I, II, 1963.
- Sartre, J.-P.: La transcendance de l'égo, 1936. L'imagination, 1936.
- L'être et le néant, 1943. L'imaginaire, 1944.
- Bachelard, G.: La psychanalyse du feu, 1938. L'eau et les rêves, 1942.
- L'air et les songes, 1942. La terre et les rêveries du repos, 1948.
- La flamme d'une chandelle, 1961. La poétique de la rêverie, 1960.
- Merleau-Ponty, M.: La structure du comportement, 1942.
- La phénoménologie de la perception, 1945.
- Sens et non-sens, 1948. Le visible et l'invisible, 1963.
- Durand, G.: Les structures anthropologiques de l'imaginaire, 1969.

(本学助教 西井 隆)